

に成長を遂げ、国内の地雷の被災数も目に見えて減っていった。そして次のステップとして、CMACが他の途上国のために一肌脱ぐことに。JICAが橋渡し役となり最初につながったのは、南米のコロンビアだった。「経済的にはカンボジアよりはるかに豊かなコロンビアへの技術指導は、これまでやってきたことへの自信にもつながりました。私たちの経験が他国に役立ち、人々を救うことができるならこれ以上うれしいことはない」と、CMACのオウム・プムロ副長官は力を込めて話す。



CMACの地雷回避教育を視察する研修。地雷・不発弾除去には住民の理解と協力が不可欠だ。CMACの連携は、アフリカのアンゴラにも広がっている

現在、国内に残っている不発弾は推定約8000万発。どこにどれくらいの不発弾があるのか、データがきちんと整理されておらず、優先的に撤去すべき場所を決めるのも難しい。このままでは地域開発も進まず、住民たちの生活向上にもつながらない。これまで日本は共に組織強化を進めてきたCMACとの合同研修を企画。2年間で計6回、1回につき最大2週間みっちり学ぶプログラムを行うことになった。

テーマは、スタッフの人材育成、情報管理、犠牲者支援、組織運営などさまざま。それぞれの国の取り組みを発表し合い、両国交互に

「不発弾は地雷と違って、踏んではすぐ爆発することは少ない。子どもの遊び場に不発弾が落ちていくことも珍しくありません」。そう話すのは、ラオスの不発弾除去を統括する組織「ラオス不発弾処理プログラム(UXO Lao)」に派遣されている林明仁JICA専門家だ。

そして今、新たな連携が進んでいるのが隣国ラオスだ。ベトナム戦争時に戦場となり、投下された爆弾は推定200万トン以上。実は、歴史上で一人当たり最も多くの爆撃を受けた国なのだ。

ラオスの不発弾をなくしたい

現場への視察も盛り込んだ。同じ分野でもやり方は多種多様。一瞬が発見の連続だった。

現在、研修は5回まで終了し、少しずつ変化が生まれてきた。「最近ではUXO Laoの会議で、CMACという言葉をよく聞くようになりました。研修で学んだことを参考にラオスで最適な手段を考えようとしていて、両組織に信頼関係が生まれていることが実感できます」と林専門家。彼らはいわば、同じ課題に向かって汗を流す「同志」。「共に協力して取り組むことが、地域の平和と安定につながる」と、プムロCMAC副長官も強調する。

まもなく、ラオスには日本の協力でかん木除去機が導入される予定。地雷や不発弾は草木の奥に隠れていることが多いため、作業が効率的にできるようになる。「全撤去に向けて、さらにスピードアップを図りたい」と、UXO Laoのスタッフたちは意気込む。今は、その使い方などのノウハウを学ぶ研修をカンボジアで受けているところだ。今後は地雷・不発弾を撤去した土地の開発をどう進めていくかが大きな課題となる。

その土地に生きる人たちが、見えない恐怖から抜け出すことができるように。カンボジアとラオスが共に知恵を出し合い、挑戦を続けていく。

現場への視察も盛り込んだ。同じ分野でもやり方は多種多様。一瞬が発見の連続だった。

現在、研修は5回まで終了し、少しずつ変化が生まれてきた。「最近ではUXO Laoの会議で、CMACという言葉をよく聞くようになりました。研修で学んだことを参考にラオスで最適な手段を考えようとしていて、両組織に信頼関係が生まれていることが実感できます」と林専門家。彼らはいわば、同じ課題に向かって汗を流す「同志」。「共に協力して取り組むことが、地域の平和と安定につながる」と、プムロCMAC副長官も強調する。

カンボジアで使われている日本製のかん木除去機。除去作業の7割はかん木の除去に費やされていたが、機材導入によりその負担と時間が減った

10年以上にわたり、カンボジアの地雷除去に貢献してきた日本。その場所には両国の国旗を掲げた看板が立てられている



カンボジアの地雷原を視察するUXO Laoスタッフ

負の遺産から人々を守る

紛争の大きな負の遺産の一つ、地雷と不発弾。何十年たってもその土地に潜み、人々の命を脅かす存在だ。カンボジアとラオスは互いのノウハウを共有しながら、その脅威へと立ち向かう。

生活を脅かす多くの塊

どこまでも広がる青い空、視線の先には広大な大地。せつせと田畑を耕す農民、元気に学校に通う子どもたちの姿があちこちで見られる。日本人にも人気の高い観光地の一つ、カンボジア。首都プノンペンへの発展は近年著しいが、地方には今もなお、のどかな光景が広がる。

しかしその裏側では、人々の日々の生活に影を落としているものがある。20年にわたる紛争で残された「地雷」や「不発弾」だ。特に地雷は少し触れただけでもものすごい破壊力で、手足が吹っ飛び、命を失うことさえある。紛争が終わっても、人々の苦しみは続いている。

そこでカンボジアの地雷の撤去や犠牲者のケアなどの強化を目指す

し、1991年のパリ和平合意締結を経て「カンボジア地雷対策センター(CMAC)」が誕生。地雷除去に取り組み始めたが、ポルト派がまだ局地的に戦闘を展開するなど、障害も多かった。

そして、日本がCMACへの協力に乗り出したのが98年のこと。これは日本にとっても新たな挑戦だった。「地雷除去は軍事的な知識も必要で、それまでJICAが支援したことのない分野でした。でも効率的に地雷を取り除くためには、一組織として、CMACがきちんと機能していくことが大事だと考えました」と、当時カンボジア事務所での協力を担当していた小向総理JICA国際協力専門員は振り返る。開発途上国の国づくり、人づくりに力を入れてきたJICAにとって、これこそ得意分野だった。

「自分たちの力で住民の生活を



UXO Laoの活動現場でスタッフたちと意見交換をする林専門家(左)



From
Cambodia & Laos
カンボジア&ラオス